OUKA
The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	はしがき
Author(s)	吉田, 豊; 森安, 孝夫
Citation	内陸アジア言語の研究. 1993, 8, p. 1-2
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/21135
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

はしがき

前号の「はしがき」にも述べたとおり，『内陸アジア言語の研究』は神戸市外国語大学の出版物として連年で発行することはできなくなった．また同大学の研究所の改革によって，発行の母体であった「アジア大陸の言語研究班」も解散した．この間，VII号は旧研究班の有志の協力によってどうにか発行することができた．しかしこれはあくまでも応急の措置であった．それ故，より永続的に本誌を刊行するために，昨年度から発行母体として中央ユーラシア学研究会という名称の神戸市外国語大学とは独立の組織を結成した．これによって，本誌を組織的に販売することができ，有志による出版のための経費の負担をいくらかでも軽減できることになった．なお，今回からパーソナル＝コンピュータ (Macintosh) によって版下を作成し，印刷費をおさえる努力も行なっている．

今回組織された本研究会には，主に内陸アジアの言語を研究対象にする旧「アジア大陸の言語研究班」のメンバー以外に，新たに中央ユーラシアの歴史・文化に興味を持つ研究者が参加している．当面発行のための業務は，「アジア大陸の言語研究班」のメンバーであった吉田豊（神戸市外国語大学，言語部門担当）と森安孝夫（大阪大学，歴史・文化部門担当）が引き受けることにした．また組版などの実質的作業は，大阪大学文学部東洋史学科の大学院生（松川節・中村淳）の献身的協力に負っている．

我々が本誌の継続にこれほど固執する理由は，我国における本誌の存在意義にある．言語・歴史・文化の研究のためには一次資料の提出が不可欠であるが，従来の学術雑誌では資料（史料）そのものよりも，それをもとにした議論・論考が論文として採用され，資料そのものを十全な形で提出しにくい傾向があった．本誌はこの点に鑑み，全体が多少長くなることを厭わず，全資料を発表する機会を与えるという方針を採ってきた．また本誌が行なっている，重要で有益な発見や指摘はどれほど短いものでも掲載するという方針も，必ずしもすべての学術誌によって採用されているわけではない．以上の２点で本誌はこ

の国の中にあって，特にユニークな学術雑誌であり，その存在意義は小さくないと確信している．できるだけ多くの方が我々の編集方針に賛同され，論文の投稿や定期購読という形で本誌の存続に協力されることを希望する．尚，本誌の編集の基本方針は，本誌巻末に掲げる執筆要項にもより具体的に記されているので，御覧いただきたい．

1993年3月31日

中央ユーラシア学研究会

責任編集

吉田　豊　　森安孝夫